まきばでひとやすみ。

大学時代に属していた聖書研究会でお昼休みにやっていた分かち合いと祈りの時間で、唯一と言っていいほどハッキリ覚えているのはある日のK君（いつもふざけてた、今や牧師）の分かち合いです。伝道者の書7章の「祝宴の家に行くよりは喪中の家に行く方がよい。そこにはすべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ」というみことばをシェアしてくれました。その時の私は「へえ～！深い！」と感嘆したものの、本当に深くは理解できませんでした。まだ身近な人の「死」を目の当たりにしたこともありませんでした。私が自分の家族の死を体験したのは30過ぎてからでした。父、その後数年、祖父、祖母の妹、祖母…と身内の死を経験し、悲しみや喪失感と共に、あの伝道者の書の言葉の意味を深く味わい、知っていったように思います。自分の知っていた人、言葉を交わし、確かに肉体があり温度があった人が、分厚い鉄の扉の先へ消え、骨と灰になって対面する。ともすれば心が壊れてもおかしくないような状況で思うのは「人の命」「生きるとは」「死ぬとは」ということ、静かで深く、重く、何ともいえない時間です。死んだ時、生きていた時に手にしたものは何1つ持っていけないのだ、と実感すると共に残るのは、その人が与えたものだということも思いました。

この年末年始に、立て続けに身近な方が2人、天に召されました。どちらの方も私の親戚ではありませんが本当に大きな喪失感と悲しみで沈み、気付くとその方々のことを考えているのでした。しかし改めて思う時、覚えていることはその優しい人柄、愛、笑顔ばかりなのです。「いつまでも残るのは信仰と希望と愛です。その中で一番優れているのは愛です」というみことばを身をもって実感し、その通りだなと知るのでした。見えないものこそ真実であり、愛こそが大切と。与えられた愛は、遺された者の心にいつまでも温かな灯を灯し続けてくれるのだと。死が絶望で終わらないことも感謝です。